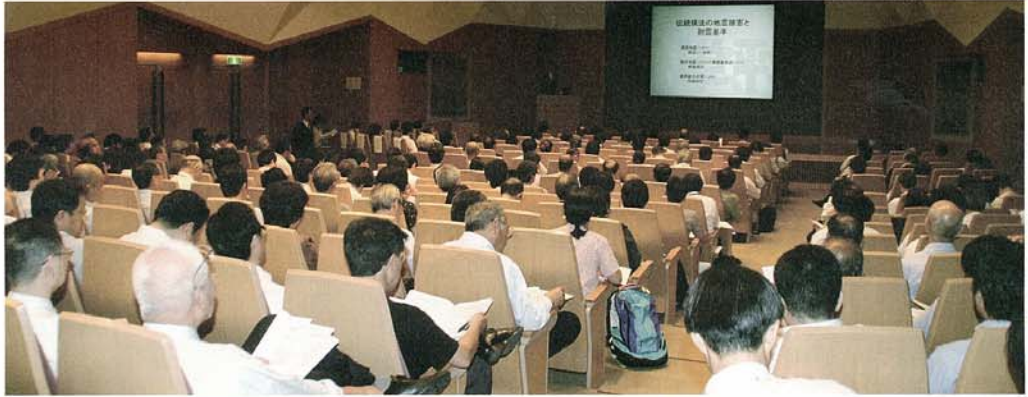


2009.08.15

Contents

坪単価から考える
住宅の価格構成
長期優良住宅に対応した
住まいが続々と登場

連載
住まいは巢まい
住まい文化の架
キニナルマドリ
住健住康
HABITAな風景
Green Earth



財団法人住宅都市工学研究所（三澤千代治理事長）が7月13日、東京・文京区の住宅金融支援機構 すまい・るホールで第34回住宅・まちづくりフォーラム「200年住宅における木造建築・伝統構法の行方」を開催しました。伝統的構法による木造住宅は長期優良住宅法の施行などを契機に改めて注目を集めており、国でも推進に向けた施策を打ち出しています。一方で、伝統構法の耐震性や耐久性などについて工学的な解明の余地も指摘されています。今回のフォーラムはこうした課題の解決に向け、官学民の学識者が多角的に木造建築・伝統構法の明日の姿を探りました。フォーラムの概要をご報告いたします。

真壁構造の信頼性確認に 急ピッチの研究・実験

芝浦工業大学名誉教授の三井所清典氏は、真壁木造の超長期住宅実験のために、高性能で合理化された構造への検討を進めているとし、とくに耐久性向上については、外壁の雨仕舞いの必要性などいくつかのポイントを説明。現しの柱・梁による内

第34回住宅・まちづくりフォーラム開催

Weekly HABITA⁰⁰⁹

外真壁構造は、HABITAでも採用している構法であり、今後のHABITAの進化という点で期待を膨らませるものでした。

伝統構法の耐震性を解説されたのが、木造住宅研究の権威である東京大学名誉教授の坂本功氏です。木造住宅の伝統構法の復活、普及を確実にするためにも、構造の強度を歴史的、感覚的にとらえるのではなく、工学的な方法で耐震性を解明し、設計手法をつくることの大切さを強調しました。

木造建築・伝統構法の普及に向け多彩な提言

そうした課題の整理と解決のため最近、大型振動台で行われた伝統構法の実大振動実験の状況も説明されました。現代工学になじみにくいとされる伝統構法ですが、現代科学の眼で耐震性、安全性など信頼確保への研究の積み上げが急ピッチで進んでいる状況が明らかになりました。

伝統的な軸組構法による 家づくりの優位性を紹介

伝統構法による住宅や古民家再生などに多くの実績を持ち、伝統構法の復権、普及に活躍している松井郁夫建築設計事務所の松井郁夫氏は、豊富な実例と実体験をベースに「木造伝統構法と現代技術」をテーマにわかりやすく説明、参加者の関心を集めました。

伝統的な民家の木組みの優位性について、実際の古民家事例を踏まえて説明。具体的には、伝統構法の建物は環境保全への貢献や建物の耐久性が長く、また十分に長寿命であること。保守管理や維持管理がしやす

いこと、再生・移築が可能であること、大工技術として体系化されていること、気候風土に根ざし、美しい景観を創出—などのポイントを改めて確認。「伝統構法は社会の仕組みにも関連している」と強調しました。

さまざまな施策で 木造・伝統構法を普及・推進へ

最後に、国土交通省住宅局木造住宅振興室長の越海興一氏が「木造・伝統構法を活かすための国の施策」をテーマに講演。

まず、木造住宅へのニーズの高まりを示すデータとして、内閣府が実施した「森林と生活に関する世論調査」の概要を紹介。同調査で「新たに住宅を建てたり、買ったりする場合、どんな住宅を選びたいか」を尋ねたところ、8割のユーザーが木造住宅を指向していることが明らかになったと紹介しました。

また、日本では利用可能な森林資源の充実期を迎えており、森林を維持するためにも、木材の利用を促進

していくことが求められていると指摘。こうした背景から、国は木材利用の促進や木造住宅・建築の普及に向けて、伝統構法による壁や接合部などの構造実験や実物大住宅を用いた耐震実験、全国各地の多様な伝統的構法の調査などを行う一方で、「地域木造住宅市場活性化推進事業」など行政施策の多角的な取り組みについて説明されました。

興味深いのは、一般木造のこれからの方向性に、200年以上も前から建てられてきた伝統構法がテーマになっている点です。在来木造という呼び方に誤解を生じやすいのですが、一般的な木造住宅ではなく、大きな木材を使い、木組みもむき出しの「現し」になっている伝統的な古民家の構造に、現代のテクノロジーで解明すべき知恵が盛り込まれているのです。

まさに、200年住宅のテーマが21世紀の日本の住宅の基本になってゆく予感を深めたフォーラムとなりました。